での編年はかなり緻密化すると思われる。最終氷期に先立つ時期の氷河消長の年代や前進・後退量が判れば、世界的な気候変化を論ずる上で貴重な意義がある。そのような事柄を直接に調べられ得る場所は世界的にもあまりないらしい。さらに海水準変動と氷河消長との関係も究明できるおもしろい場所であるので今後の調査研究が期待されるのである。

引用文献

- ALLEN, C. R. (1963) Earthquakes and mountains around the Pacific. *Bull. Calif. Inst. Tech.*, **72**, 1—16.
- ALLEN, C. R. (1965) Transcurrent faults in continental areas. *Roy. Soc. (London) Phil. Trans.*, **258**, 82—89.
- ARABASZ, W. J. (1968) Geologic structure of the Tal-tal area, northern Chile; in relation to the earthquake of December 28, 1966. *Bull. Seis. Soc. Am.*, **58**, 835—842.
- ARABASZ, W. J. (1970) Geological and geophysical studies of the Atacama fault zone in northern Chile. *Ph. D. Thesis of the Calif. Inst. Tech.*
- HEUSSER, C. J. (1966) Late-Pleistocene pollen diagrams from the Province of Llanquihue, southern Chile. *Am. Phil. Soc. Proc.*, **110**, 269—305.
- HEUSSER, C. J. (1974) Vegetation and climate of the southern Chile lake district during and since the last interglaciation. *Quatern. Res.*, **4**, 290—315.
- 町田 洋 (1976) アンデスで気候段丘を考える。地理, **21**, 56—65.
- MERCER, J. H. (1972) Chilean glacial chronology 20,000 to 11,000 carbon-14 years ago; some global comparisons. *Science*, **176**, 1118—1120.
- OKADA, A. (1971) On the neotectonics of the Atacama fault zone region—*Bull. Dept. Geogr. Univ. Tokyo.*, **3**, 47—65.
- 岡田篤正 (1974) 中南部チリ, プエルトモンテ付近の氷河地形, 氷河(性)堆積物および最終氷期の絶対年代. 日本地理学会予稿集, (6), 94—95.

アメリカ原住民の起源に関する研究

埴 原 和 郎*

Studies on Origin of the First Americans

Kazuro HANIHARA*

アメリカ原住民, つまりアメリカインディアン, エスキモーおよびアリュートについては多くの研究が行なわれ, その起源がアジアの古い蒙古系集団に求められるということは, 今や周知の事実といってもよいであろう。

アメリカの人類学の父ともいわれるヘリチカ(A. Hrdlička)は1937年に、「ミネソタの貴婦人」とよばれる古代人骨(沖積世初期)を研究し, これが現代のインディアンにつながると同時に, 多くのアジア人的要素をもつことを指摘した。またハーバード大学のハウエルズ(W. W. Howells)は, 周口店の上洞人を「アジアのアメリカインディアン」として, 両者の密接な類縁関係に注目した。

このように, アメリカインディアンの起源に関する研究は, 1930年代から主としてアメリカの人類学者によって進められてきた。同時にアラスカのエスキモーやアリュートについても多くのデータが集められ, 北東アジアにすむ種々の集団との比較研究が行なわれた。近年においてはグリーンランド・エスキモーをも含め, コネチカット大学のラフリン(W. S. Laughlin)らの研究が目

立っている。

一方, 考古学の分野ではとくに北米とシベリアとの関連性が注目され, チャード(C. S. Chard)を中心として精力的な研究が進められてきた。さらに戦後になってから発展の著しい人類遺伝学の分野でも, シカゴ大学のジンスバーグ(B. E. Ginsburg)らの研究があり, 最近では日本, アメリカ, カナダ, オーストラリアなどの多くの研究者が種々の集団について報告している。また地学, とくに各遺跡の年代測定や古気候・古地理については, アメリカ地質調査所のホプキンス(D. M. Hopkins)の活動が目立っている。

1960年代に入ってから, このような種々の分野の研究成果に基づいて人類学, 人類遺伝学, 考古学, 地質学など, 関連分野の協同研究が行なわれるようになり, とくにアジア・アメリカの北方圏にすむ集団の研究が脚光をあびてきた。これはいうまでもなく, アメリカ原住民の起源を知るためには, この地方の研究がきわめてurgentであるという理由による。したがってこの点に

* 東京大学理学部人類学教室, Department of Anthropology, Faculty of Science, the University of Tokyo.

ついでに会議もかなり頻繁に行なわれているが、ここではとくに二つのシンポジウムを紹介したい。

その一つは、1966 年に札幌で行なわれた「北方住民の小進化と集団史に関する日米会議」で、日本から 9 名、アメリカ・カナダから 6 名の話題提供者を集めて開かれた。この 15 名の中には、上記の各分野の研究者が含まれていたことはいうまでもない。これは、この種の国際会議としてはおそらくはじめてのものと思われるが、アジアとアメリカとの情報交換の必要性から企画されたといえる。

このとき、日本側としてはアイヌを含む日本人の小進化という問題を前面に押し出して対応したのであるが、北方圏集団については、シベリアのデータが著しく不足していることが痛感された。しかし日米間の情報交換という意味では、きわめて大きな成果があがった。たとえばアイヌの起源についての日本側の最近の研究は、その後アメリカの学者の間にもかなり深く浸透したし、歯や血液の遺伝物質のアジア人的特徴についても、アメリカ側で大きな関心をよんでいる。さらにその後の人類学者や考古学者の交流という意味でも、このシンポジウムの果たした役割は大きい。

このような問題についての議論は、1968 年に東京で開催された国際人類学民族学会議でもとりあげられたが、

さらに注目すべき会議は、今年 (1976) 8 月に、ウィーン近郊のブルク・ヴァルテンシュタインで行なわれたシンポジウム「アメリカ原住民の起源と類縁性」にみることができる。

この会議はアメリカ、カナダ、英国、フランス、オーストラリア、ソ連および日本からの 16 名の参加者によって行なわれたが、10 年前の札幌での会議にくらべ、研究の地域も分野もはるかに広いものであった。

ここでくわしく紹介する紙面はないが、地域は東南アジア、日本、シベリア、南北米大陸、グリーンランドを含み、分野はさきにあげたもののほかに生理学や文化人類学を加え、文字通り多角的研究が行なわれるようになったことを認識させられた。とくに注目すべき点は、シベリアのデータが少しずつではあるが入るようになったことで、このことは今後の研究に、大きなプラスとなるにちがいない。

私の専門である人類学についていえば、この種の研究は日本人の起源や類縁性にも深く関係するもので、日本人研究者も積極的に種々の協同研究を行なうことが必要であろうと考えられる。アメリカ原住民の研究は、そのまま北東アジア人の研究につながるものであって、私どもも深い関心をもちざるをえないのである。

海外調査の発表方法と視点

鈴木 秀 夫*

On the Media of Publication and Viewpoint for the Academic Research in Foreign Countries

Hideo SUZUKI*

1. 日本語で発表すること

われわれは、海外に関する知識を得るために、多大の時間を費して欧米語を勉強し、欧米語によって、遅い速度で、しかも、しばしば不鮮明に、理解しつつある。

日本の国力が発展して、海外調査が行なわれるようになったのは、嬉しい限りだが、その調査の報告が、しばしば欧文によってのみなされていることが残念でたまらない。せっかく、日本の力によって得られた知識が、いわば、欧米文化圏の蓄積を増やす結果になっている。国

民に還元されていないといってもよい。

科学の成果は、国際的なものだという考えがあるけれども、それはやや抽象的な議論で、現実には、日本人は日本語で考え、日本語で研究している。日本語の文献が増えることによって、日本の研究の厚さと深まりができる。たしかに、最先端のレベルを高めるためには、狭い範囲の文献を勢いよく読み進んで行けばよいし、その際には、日本語の文献を読む速度と、欧文の文献を読む速度の差はあまり問題にはならないであろう。

しかし、知的体系の厚みを考える場合、また具体的に

* 東京大学理学部地理学教室, Department of Geography, University of Tokyo.